

○「子ども療養支援士」6人が巣立ち

(2013年3月17日)【北陸中日新聞】【朝刊】【その他】



4月から小児科病棟へ

病気や障害がある子どもの立場で支援に取り組む「子ども療養支援士」の養成団体が16日、東京都内で研修の修了式を開いた。1年間の研修を終えた看護師や保育士ら女性6人が支援士の認定を受けた。4月から東京、茨城、神奈川、石川、大阪の5都府県にある病院小児科病棟で勤務する。

療養支援士は、病気や障害を子ども自身が理解して受け止められるよう支えたり、痛みが伴う治療が必要な子どもに絵本や縫いぐるみを使って分かりやすく心の準備を促したりするのが仕事だ。

「日本では『病気のことは親が分かればいい』という考えが強いが、子ども自身が受け止めることで、自分で完治しようとする力が働く。それをサポートするのが支援士の役割です」。養成団体「子ども療養支援協会」事務局長を務める順天堂大の田中恭子准教授(41)は話す。

同協会による認定は今回が2回目で、巣立った支援士は計11人となった。協会によると、こうした専門職は米国では小児科病棟の9割以上に配置されている。日本では多くの病院が必要性感じながらも、人件費の問題などを背景に配置が進んでいないという。

修了式を終えた元特別支援学校職員の藤岡静香さん(37)＝堺市＝は「無我夢中で走ってきた1年だった。仲間と手を取り合って頑張りたい」と話した。